明治安田生命

関西の風物詩

専門家インタビュー

関西の地勢と気候 中島保則(一般社団法人日本気象予報士会 理事・副会長 関西支部長)

気象予報士として、長年関西の気象予報に携わってきて思うのは、関西は変化に富んだ地形が、四季折々の姿をより個性的に鮮やかに感じさせてくれる地域だということです。関西は、日本海・瀬戸内海・太平洋の3つの海に面し、日本一大きな琵琶湖があります。この海水・湖水の水温が、各地域の気温に影響を与えています。また関西は、北には中国山地・丹波高地、東には伊吹山地・鈴鹿山脈、南には紀伊山地と、高い山に囲まれています。この山によって雲や風の通り道が決まり、季節ごとの雨や雪の降り方に影響を与えています。
たとえば、関西のほぼ中央に位置する大阪平野は、瀬戸内気候の特徴である少雨ですが、日本海側・太平洋側は多雨が特徴です。日本海側は、冬を中心に北からの寒気の影響を受けて雪や雨の日が多く、太平洋側では南からの湿った空気の影響を受けて夏に雨が降りやすいためで、両地域とも日本でも有数の多雨地帯になっています。昔から「弁当忘れても傘忘れるな」と言われる所以で、両地域には大阪の3倍近くの雨が降ります。また雨の降り方も地域によって異なり、日本海側に降る時雨は土砂降りと言ってもよいほどの雨脚で、京都・大阪などの平野部に降る軽い雨脚の時雨とは随分違います。これも、地域ごとの気候の差なのです。

滋賀県の気象

滋賀県は、面積の6分の1を占める琵琶湖と、伊吹・丹波山地、鈴鹿山脈に大いに影響を受けて、北陸型・瀬戸内型・東海型の各気候が重なり合っています。比良山地に沿った湖西地方は、寒波や台風の吹き返しといった特定の気圧配置になると、山脈の付近で〝おろし風〟が吹きます。地元では「比良おろし」、「三井寺おろし」の名で知られています。また晩秋の湖西地域で、季節風が吹いた時などに発生する霧のような降雨は「高島時雨」と呼ばれ、局地的な雨の降り方をします。
また湖北から湖西には、高い山が途切れた峠がいくつかあり、冬になると日本海からの冷たい北風や雲の通り道になるため降雪が多くなります。米原〜関ケ原間で雪のために東海道新幹線が徐行運転するのは、この地形の影響です。

京都府の気象

京都府は、琵琶湖西岸から兵庫県東部にかけて広がる丹波高地を境にして、北部は日本海側気候、南部は瀬戸内気候に大別されます。
京都市域は、夏に雨が多く冬は少ないという瀬戸内気候ですが、三方を山に囲まれているという地形的特徴から、寒暖の差が大きい内陸性盆地気候の面も有しています。また盆地のため、年間を通じて風が弱いという特徴があります。京都の夏の暑さを「油照り」、冬の寒さを「底冷え」と表現することがありますが、風が弱く空気が動かないことによるものだと考えられます。
晴れていたかと思うと、急に北山の方からさぁっと降ってくる雨「北山時雨」は、情緒的で風情があることから、晩秋から初冬にかけての京都の風物詩になっていますが、これも京都の地勢によるものです。

大阪府の気象

大阪府は、温暖な瀬戸内気候に属します。夏が暑いこと、1年を通して雨の少ないことが主な特徴です。大阪市は、海からの風の通りが悪く、熱気のこもりやすい地域であるため、最高気温が30℃以上の真夏日は年平均68日、最低気温が25℃以上の熱帯夜は年平均31.5日で、全国トップクラスの暑さです。そんな大阪府の中でも、一番熱がこもりやすいのは枚方市あたりで、海が遠く、熱が逃げにくいことに起因しているようです。
大阪府の年間降水量は1306㎜と少雨です。雪も滅多に降らないと思われていますが、実は年に数回降っています。皆さんの寝静まった頃にちらほらと降っているため、あまり知られていません。

兵庫県の気象

兵庫県は、県のほぼ中央を東西に横切る中国山地を境にして、北側は冬に降水量の多い日本海側気候。南側は乾燥した晴天が続き、雨も少なく温和な気候の瀬戸内気候に分かれます。
神戸市街地は瀬戸内気候ですが、海が近いため、気温は海水温の影響を受けます。夏に熱帯夜が多いのは、海水温が25℃以上あるため、冬に冬日が少ないのは、冬の海水温が10℃くらいあるためで、沿岸の寒暖差を小さくしています。
兵庫県で特記しておきたいのは、「六甲おろし」です。阪神タイガースの応援歌でおなじみですが、六甲おろしは六甲山系から吹く山颪です。しかし六甲おろしは冬季に多く、野球シーズンに甲子園球場に吹いているのは南よりの浜風です。

奈良県の気象

南北に長い奈良県は地域によって気候の違いが大きく、北西部の大和盆地は内陸性気候、北東部の大和高原は内陸性気候と山岳性気候、南部の山岳部は山岳性気候の特徴があります。共通しているのは、どの地域も気温の日較差が大きく、夏は暑く、冬は寒くなることです。
特に、北東部の大和高原では冬の寒さが厳しく、春の訪れが遅いことが知られています。また南部の山岳部は夏の雨量が極めて多く、大台ケ原山を中心とする南東山地は日本屈指の多雨地帯です。

和歌山県の気象

和歌山県の面積の約8割は、紀伊山脈を中核とする標高1,000m前後の山岳地帯です。和歌山市など県北部は年間を通じて天気や湿度が安定して、降水量も少ない瀬戸内気候です。一方県南部は、太平洋を流れる黒潮の影響を受けて、とても温暖な太平洋岸気候ですが、きわめて降水量が多く、台風の影響を受けやすい地域でもあります。
県北部・県南部、どちらの気候にも共通の特徴は、平均気温が高いことと、日照時間が長いことです。これはみかんの生育条件に合致しており、和歌山県が全国一のみかんの産地であることは、気象の恩恵なのです。

春の風物詩

おいさで漁

高島市マキノ町辺りで春になると行なわれる「おいさで漁」は、琵琶湖のあゆ漁の漁法の一つです。実際には3月から6月ごろまで行なわれるそうなのですが、初めて見たのが湖水はまだ冷たい春先。以後も見かけるのはいつもこの時期なので、私の中では琵琶湖の早春の風物詩です。カラスの羽を湖面で動かしてあゆを驚かせて、逃げていく先で網をひろげて待ち、あゆが網に入るのを待って獲る。純粋に魚と人間の知恵くらべ。獲りすぎない琵琶湖の漁法の一つですが、この漁を見かけると「春だな」と思います。(西本梛枝 文筆家)

平安神宮の紅しだれ桜

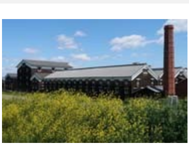
京都の数ある名所の中で、『細雪』の幸子が最も愛していたのが、平安神宮の桜。中でも、神苑の入り口にある紅しだれは、海外にまでその美を謳われたほどの見事さです。平安神宮の例祭が行なわれるのもちょうど桜のころ。額殿では奉納花展も開かれ、献花させて頂いていますが、その折には必ずこの紅しだれを堪能して帰ります。寒緋桜、山桜、染井吉野、里桜…。美しい桜は数あれど、しだれ桜ほど京都に似合う花は他にないのかもしれません。はんなりとした優しい紅の色合いと流れるような枝ぶりからは、柳のようにたおやかな印象を受けますが、実は意外とねばりの強い木。芯の強さを奥に秘めた京女を思わせます。(笹岡隆甫 華道「未生流笹岡」家元)

造幣局桜の通り抜けで見つけた兼六園菊桜

ソメイヨシノが散って葉桜の4月中旬、大阪は造幣局の「通り抜け」でにぎわう。全国から観光バスで観桜ツアーが訪れ、車のナンバープレートを見るだけで楽しい。1883(明治16)年に始まり、2005(平成17)年には1週間で過去最

多の114万人を集めた。この季節、大川沿いの造幣局構内では「大手毬」、「小手毬」など八重桜の珍種を中心に134種349本が咲き乱れる。
「まあ、きれい」。感嘆の声が飛び交う中、私は毎年のように「通り抜け」終点付近にある「兼六園菊桜」に会いに行く。もう半世紀前になる。初任地が金沢だった。ガイドブックには「薄紅色の花ビラ300枚以上もある国の天然記念物」とあるが、着任する前年に原木が枯死。私には〝幻の花〟だった。
4年後に大阪に転勤。何気なく参加した「通り抜け」を終えようとしたとき、花びらの詰まった珍しい桜が目に入った。名札には「兼六園菊桜」の文字。ついに出合った!小さい花ながら存在感がある。気力が生まれてくる。私をワクワクさせる花だ。(山口安昭 泉大津市文化フォーラムマネジャー)

伏見・松本酒造の菜の花



酒好きとあって、京都・伏見の酒蔵にぞっこん惚れています。春、濠川を観光屋形船「十石舟」に揺られ、桜花の下、酒蔵巡りをするのは至福の悦びですね。しかし桜の開花は短い。それが済むと、ぼくは西方の新高瀬川を臨む松本酒造へ足を伸ばし、川原に広がる菜の花に身を託します。江戸後期にルーツを持つといわれる酒蔵とレンガ造りの煙突を背景にして咲き誇る菜の花は理屈抜きに絵になります。「イエロー・ワールド」全開です!そこは時代劇の撮影地としてもよく知られています。運が良ければ、有名な俳優と出会えるかもしれませんよ。(武部好伸 エッセイスト・作家)

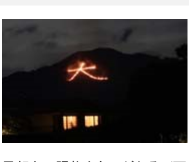
淡嶋神社の雛流しの神事

和歌山県の西北端、紀伊水道の入り口に臨む加太浦の里に鎮座する淡嶋神社で、毎年3月3日に執り行なわれる流し雛の神事は、自分の身に取り憑いた災厄を雛人形に乗り移らせ、それを形代として海に流すことで災厄から逃れようとする信仰習俗の一例である。国内各地の人々が自分の形代として社に奉納しておいた雛人形は、儀礼の後に御座船に積み込まれ、社前の海岸から沖へ向けて放流される。波打際から海上へ押し出され、春寒の風波とともに次々に沖へ漂っていく情景は、「もののあわれ」そのものである。毎年一度のこの信仰行事は、美しくも哀しい早春の風物詩として、毎年多くの見物客を集めている。(宇田 正 追手門学院大学名誉教授)

春の風物詩ではほかに、鵜殿のヨシ原焼き、大阪城公園の梅林、桃源郷・悪党の里、淀川背割堤の桜、野田藤、イカナゴの釘煮、左義長祭り、御影だんじり祭り、大相撲大阪場所などをご紹介しています。

夏の風物詩

厄除けの消し炭



京都市内の商家・民家の玄関の軒には、よく祇園祭の厄除け粽(ちまき)が下がっている。わが家でも息子が囃子方にご奉仕している関係で、月鉾の粽を飾るようになってはや30年。さて家によってはその横にもう一つ、奉書半紙に包み、水引を掛けた消し炭をつるしているところも多い。これは8月16日五山送り火の一つ「大文字」が灯された如意が嶽の火床へ翌早朝登山、拾って‥いや頂いてきたもの。家内安全厄除けのしるしである。炭が立派なのは家人の早起きの賜物をものがたる。(西村真一郎 朝日放送(株)社友)

佐用町のひまわり畑

夏と言えば「ひまわり」。「ひまわりの町」といえば兵庫県佐用町です。同町の旧南光町エリアで1990(平成2)年に始まったひまわり祭は、合併して佐用町になった後も毎年開催。天候不順だった2018(平成30)年も、7月下旬〜8月初旬にかけて100万本以上のひまわりが観光客を魅了しました。同町のひまわり畑は町内数か所に点在し、地区ごとに種まきの時期をずらすことで長い期間、開花を楽しめるよう工夫されています。毎年一番早く咲く宝蔵寺地域はJR姫新線の線路に沿って畑が続き、ひまわりと車体を一緒に撮影できるカメラマン垂涎のスポット。20戸ほどの小さな集落ですが、住民有志が春の種まき以降、苦労して花を育て、開花時は団体バスの誘導までこなします。畦道のあちこちには地域のお母さん手作りのユニーク案山子も出現。その可愛さに暑さも吹き飛び、ほっこりできます。(木村真弓 フリーアナウンサー)

醒井地蔵川のバイカモー透きとおる清涼感ー

醒井(さめがい)は、米原と関ヶ原の間に位置する、豊かな水に恵まれた清流の町である。中山道の宿場町として重要伝統的建造物群保存地区に指定され、「平成の名水百選」にも選ばれ、日本遺産にもなった。
醒井の町を地蔵川が流れ、この小川に珍しいバイカモが繁茂し、梅のような白い水中花が咲き乱れる。バイカモは水中の藻のように見えることから梅花藻と表記するが、藻類には花が咲かないので藻ではなく、キンポウゲ科の水草である。地蔵川は豊富な地下水源の清流であることから、ゆらゆら流れに身をまかせる茎や葉の緑も鮮やかで、白い花も映え、透きとおるような清涼感に満ちている。(西田正憲 奈良県立大学名誉教授)

甲子園球場は西宮市にあり

高校球児が憧れるのは、甲子園球場のグラウンドに立つことだ。この甲子園球場は西宮市にあり、西宮市の中学生は甲子園球場のグラウンドで体育大会の組体操をしたものだ。わたしも、子どものころに立ったことがある。
ところが、全国各地には「甲子園球場は大阪にある」と思っている方が少なくないようで、その一因に、球児の宿舎があるようだ。昔は西宮市内に多くの宿舎があり、朝の公園には素振りをする球児たちの姿が見られ、近所の野球少年たちの憧れとなっていた。しかし今の若者には大部屋・たたみは嫌われ、今、西宮市で宿舎として利用されている旅館は3軒のみに。ホテルの個室が好まれることも時代の流れで、宿舎は近隣都市のホテルへ分散してしまった。そこで地元西宮市のアピールが始まった。夏の甲子園の開会式前の恒例行事になったのが、外野席での人文字だ。「西宮をPRする会」が主導し、同会の活動に賛同する老若男女約800人が、青と白色のボードをめくり返して「ようこそ西宮市へ」「甲子園は西宮にあり」をアピール。テレビ中継に映り込んで、全国へ発信される。この人文字、途中休止も経て、2018(平成30)年までに14回実施されたが、2019(令和元)年以降の続演は未定。(逢坂御堂 メディアプロデューサー)

夏の風物詩ではほかに、西除川のヒメボタル、ひょうごの風鈴、ハモ、甲子園球場の「かちわり」、住吉さんの堺渡御、豊国踊り、京町屋の地蔵盆、PL花火芸術、なら燈花会などをご紹介しています。

秋の風物詩

金色にたなびく花ススキの草原：岩湧山

金剛山と紀見峠を挟んで岩湧山(標高897.7m)という山があります。この山の山頂付近は広大な花ススキ(正確には茅)に覆われ、山頂からの展望が良いことで知られています。岩湧山は山頂こそ平原のようになっていますが、中腹にある岩湧寺が葛城修験道二十八宿の十五番目になっており、山の周辺は岩壁がいくつも見られ、まるで岩場が沸き立つように見えることから「岩湧」と呼ばれるようになったようです。でも、岩場を通らなくても、山頂に登る登山道が整備されているので、ハイキングコースとして紹介されています。
例年、10月から11月中旬にかけて、山頂付近のススキが太陽の光を浴びてまるで金色に輝いているように見え、登山者を感動させる風景になります。また、山頂からの展望は大阪平野を一望でき、天気が良ければ六甲山をはじめとする六甲山系の山々や淡路島が見えます。山道を歩いた先に広がる金色の草原は、紅葉とは一味違った秋の風物詩といえるでしょう。(高橋伸和 南海電気鉄道(株))

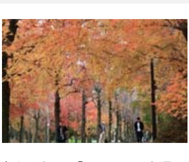
串柿の里

晩秋になると、オレンジ色に染まる村がある。和歌山県かつらぎ町の山間にある四郷地区。400年の歴史がある串柿の里だ。農家の軒先、道端、ありとあらゆるところに串柿が干されていて、オレンジの暖かな色に地区が包まれ、近づくと甘い香りを漂わせる。
串柿は、お正月の鏡餅に飾られる縁起物。今や全国の串柿のほとんどがこの地域で作られている。生産が盛んになったのは、和歌山が日本一の柿の産地であることに加え、この地域に吹く独特の風に秘密がある。地区の北側にそびえたつ三国山。晩秋になると吹き始める北風は、この三国山にぶつかって山の手前で雨を降らせるため、四郷地区には冷たく乾燥した風が吹き下ろす。地元ではこの風、「三国おろし」と呼ばれている。この三国おろしの恵みによって、串柿は芯まで乾き、質の良いものに仕上がる。
あのオレンジに染まる光景、そして今も昔も変わらぬ正月を迎えることができるのは、山と風のおかげなのだ。(垂水千佳 気象予報士)

穴太の里の彼岸花

彼岸の中日の1〜2週間、亀岡市の穴太寺(あなおじ)周辺の畑一面に彼岸花のレッドカーペットが広がる。布団に入った寝仏のお寺として知られる穴太寺。彼岸花は曼珠沙華とも呼ばれ、歌われてきた。赤い花なら、英語でレッドスパイダーリリー。花言葉は「悲しい思い出」「あきらめ」など。
お墓参りや野辺の送りの行列が歩くあぜ道に咲く赤い花は不吉な花とされてきたが、田圃に植えられたのは、鱗茎の毒がモグラやネズミ除けになったからである。9月から10月にかけて、穴太の里は彼岸花を愛でる観光客がたくさん訪れる。(樋口須賀子 宮本順三記念館豆玩舎ZUNZO副館長)

千里ニュータウンの並木道



大阪の千里ニュータウンが誕生して、60年ほどが経つ。誕生当時は緑が少なく、埃っぽくて索漠とした感じだったこの地域も、長い年月を経て緑豊かな心安らぐ住宅地に変貌した。それだけにお勧めのスポットはいくつもあるが、なかでも私のお気に入りは、紅葉の時期、歩いてまことに気持ちのいい2つの並木道である。
一つは北大阪急行の桃山台駅から阪急の南千里駅を経て、山田下の交差点あたりまでの「千里イチョウ通り」と呼ばれる道すじで、秋になると真黄色に染まった銀杏がハッとするほど美しい。そしてもう一つは、阪急北千里駅から阪大の吹田キャンパスに通じる千里北公園までの「三色彩道」と呼ばれる通りである。こちらはアメリカフウ、タイワンフウ、トウカエデの3種の落葉高木が綾なす紅葉が鮮やかで、遠くからスケッチに来る人がいるほどだ。住まいのすぐ近くに、このような私にとっての秋の風物詩が存在するというのは嬉しいことだ。(辻 一郎 毎日放送客員)

秋の風物詩ではほかに、お月見、竹田城跡の雲海、般若寺のコスモス、中之島公園のバラ園、極楽坊の萩、長谷寺の紅葉、丹波篠山・黒大豆の枝豆、大阪の真ん中でご来光、大阪マラソン完走タイムの中づり広告などをご紹介しています。

冬の風物詩

初冠雪

夏が終わり、高い山の頂上付近に雪が積もっているのを初めて認めた時を初冠雪と言い、「対象とする山の一部が雪等の固形降水により白くなった状態が初めて見えたとき」と定義されています。初めて見えたときなので、雲に隠れて見えないと初冠雪にはなりません。
気象台では季節の進み具合を知る目安として初冠雪の観測を行なっており、近畿地方では、現在、滋賀県の彦根地方気象台から伊吹山(標高1377m)と比良山系(標高1100m前後)の2か所の観測をしています。いずれも気象台からは20〜30キロ離れた山なので、気象台の屋上から双眼鏡で確認をしています。初冠雪は11月中ごろに観測され、その3週間後ぐらいに麓で初雪の降ることが多くなります。
気象台では、他にも初雪や初霜・初氷などの観測をしていますが、いずれも気象台の職員が屋外に出て、目で見て観測しています。意外とアナログな観測なのです。寒い冬の朝、まだ暗いうちから観測をされている縁の下の力持ちがいるから、年ごとの季節の歩みがわかるのです。冬の便りが届いた時には、「いつもお世話になっております･･･」と、陰ながらつぶやいています。(吉村真希 気象予報士・気象キャスター)

ため池の水を抜くと、大和に冬がやってくる

古くは日本書紀に出てくる大和のため池。その数、奈良盆地には大小あわせて数千といわれ、素朴な水景をなしている。堤の強度を守るため、晩秋のころより水が抜かれる。池底があらわになる。干潟になった泥のなかに何かいるのか、野鳥が飛来してついばんでいる。大和に冬が来たなと思わせる。
昔は、池の水を抜く折に、コイやフナなどの淡水魚を捕獲し、秋祭りのごちそうにしたと、奈良市の市街地で聞いた。街のど真ん中にそんな池があったのだ。郊外のため池もだんだん減ってきた。ウナギがかかったこともあるとお年寄りは話し、大和川水系の循環を思わせる。(浅野詠子 ジャーナリスト)

セコガニ

セコガニ(但馬)、コッペガニ(丹後)、セイコガニ(越前)、コウバコガニ(加賀)と、所によって呼び名が変わるメスのズワイガニ。魚屋の店先で、偉そうな松葉ガニの横に無造作に積み上げられたセコガニに、つい手が出てしまいます。甲羅を開けて朱色の内子がしっかり詰まっていると、思わず頬がゆるみます。濃厚なカニみそ、舌触りを楽しむ外子、取り出すのがちょっと面倒な足肉と比べても、見た目、味とも独自の主張をしてくれます。4種類の味を楽しみながら杯をかたむける至福のひと時。内子は漁期が短いメスガニならではの、晩秋から初冬にかけての珍味です。カニアレルギーの家内にはなかなかわかってもらえませんが。(角野幸博 関西学院大学教授)

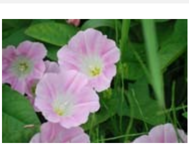
神戸ルミナリエ

関西に住んでいて、毎年12月が近づくと、「そろそろ…」という空気が感じられる。電車の吊り広告や新聞などに前年の写真が掲載されるようになるし、ニュース番組では「今年で〇〇回目の…」と紹介されることが多くなる。2018(平成30)年で24回目の開催となった神戸ルミナリエである。
1995(平成7)年1月17日午前5時46分、私は神戸市内で阪神・淡路大震災に被災した。当時、阪神間に住んでいた人は多かれ少なかれ経験したことで、特別なことではない。避難のため動き出した阪急に乗るため、うねる線路を西宮北口まで歩いたこと、ぎゅうぎゅう詰めで降り立った梅田で、普通にバーゲンが開催されていたこと。当事者とそうでない者との乖離・落差を強烈に感じた経験として鮮明に記憶している。
その年の暮れに開催されたのが「神戸ルミナリエ」だ。最初は「なにそれ?」だった。なぜ電飾なの?とか、何かするにしてもなぜ日本の伝統的な表現ではないのかとか多くの疑問が浮かんだ。避難生活を送っている人も大勢いたし、インフラなどの復興にお金を使うべきではないかとも考えた。しかし考えてみると、京都の祇園祭の山や鉾は応仁・文明の乱からの復興のシンボルでもある。ルミナリエが震災の追悼・鎮魂・復興のシンボルになるかもしれないという気持ちもどこかにあった。
果たしてルミナリエはシンボルとなり、神戸の冬の風物詩となった。多くの方が亡くなり、大きな被害を蒙った震災からの復興のシンボルを風物詩とするのは不謹慎かもしれない。しかしルミナリエがあることで震災に思いを馳せ、あらためて真摯な気持ちで1月17日に臨むことができるのだ。この催しが長く続き、災害がもたらす被害と教訓を考えさせる機会として機能し続けることを強く願う。(古野 貢 武庫川女子大学准教授)

冬の風物詩ではほかに、鴨川のユリカモメ、冬も潤う大阪、天日干し、「冬枯れ」の奈良、大根焚き、朝来の岩津ねぎ、なら瑠璃絵、甲子園ボウル、ちょろけん、石上神宮の大とんど、オコナイなどをご紹介しています。

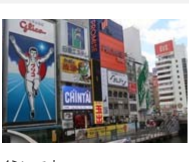
地域の風物詩

無人駅の花暦



最寄りの無人駅の花暦がなかなか面白い。桜の季節が終わると、ツクシがどこからともなく線路沿いに芽生え、消えうせるや否や新緑が育ち始める。梅雨が明ける頃になると、今度は枕木の隙間にヒルガオが咲き始め、夏を通じて淡いピンク色の花が目を楽しませてくれる。秋から冬への変化は早い。次第に蒲生野が枯草色に染まり始めると、ある日突然にして畦道や線路に沿って彼岸花が咲き乱れる。追ってネットフェンスのカラスウリが朱色になり、虫の声も止んで、最後に杭に絡まった蔦が紅くなる。(上野正章 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究員)

グリコ看板の着せ替え



日本国内のみならず、いまや訪日外国人からも、大阪と言えば「グリコの看板!」と思い出していただけるのは、誠にありがたいことです。道頓堀のグリコの看板も、その時々に応じてデザインが着せ替えのように変わり、大阪のシンボルによる風物詩的な存在になってきました。最近では、大阪万博の応援にも一役買うデザインで点灯するなど、事あるごとに、訪れた人たちを楽しませてくれています。もはやあのランナーに住民票を差し上げ、名誉市民にしてあげたいくらいです。
特に、2014(平成26)年、それまでのネオン管による照明からLED照明に変わり、表現の幅が大きく広がりました。色が変わり、動きの要素が加わり、照明というより大型ビジョンを見ているようです。これからどのように進化してゆくのか、楽しみな看板なのです。(古山喜章 経営コンサルタント)

地域の風物詩ではほかに、水郷の四季、京の街並み歩き、神戸港の汽笛と鐘の音、霧と坂のある宝塚の四季などをご紹介しています。